

## あとがき

### 泉水 英計

高江洲さんから河原田盛美の共同研究を立ち上げるので協力して欲しいという依頼があったのは2013年の暮れだっただろうか。話す度に学ぶことの多い同学であり、増田先生がご一緒だということにも惹かれた。わたしがまだ学生時代に宮古島のフィールドでお見かけして以来の再会であった。そのころのお二人は、中野、中林の両氏を加えた研究チームで既に『沖縄物産志』の校注作業を終え、東洋文庫の一冊として上梓する準備に入っていた。いわば河原田研究の最前線をいく研究グループである。わたしはといえば、以前沖縄にいたときに、齊藤（郁子）さんから聞いていた人物がそういえば河原田であったかと後から気づくといった程度の理解であった。耳学問すら覚束ない有様だったが、常民研との連絡係を引き受けることになった。調査行や研究会合に十分に参加することもできなかったが、いま3か年間の共同研究の区切りにあたり、奥会津訪問時の所感に触れて「あとがき」にかえたい。

鬼怒川から野岩鉄道に入ると列車は急峻な溪谷を縫うように走る。車に乗り換えて冠雪のみえる分水嶺を越えると、伊南川が形成したひらけた川筋におりる。そのほとりにたつ河原田邸は、想像したよりもこじんまりしていた。松田道之に随伴して琉球処分へのぞみ、内務省官僚として藩政期琉球で活躍した人物であり、帰郷後も豪農富商として家勢を伸長させ、福島県議を長く務めた人物だと聞いていた。威圧するような門構えの屋敷を予想していたので意外であった。神主を務めたこともあるという河原田らしく、母屋の内部には、設えた神棚の他にも紙札を飾る棚が目立った。障子の組子は細く手がこんでいて、凝った造りの床の間も目を引いたが、鴨居から上が高い座敷は暖まりにくくすぐに手足がかじかんだ。

母屋の手前にある堅牢な土蔵から資料を運び込み次々と撮影した。家憲家訓家伝書には「学業ニ優ナルモノヲシテ実男女婿ニ三戸以上五家ヲ立ツ可キコトヲ遵守セシム」とあり、家名の永続を期する河原田の思いが伝わる。文書類に混じって調度品があり、同行の小野さんが支那焼煎茶茶碗を出して見せてくれた。椀の収まった木箱には「明治八年琉球ニ於テ求ム」とある。この雪深い山村に根付いた旧家の人士が、日差しの強い珊瑚礁の島の役人となるといったことは、近代国家ならば当然起こることだ。だが、そのような状況が明治維新から数年で成立していたことを改めて認識させられた。また、書簡類や葬儀の諸用帳からも河原田の広範な人脈と活動範囲がうかがわれた。さらに、後日、増田先生が探究していたが、河原田は生糸相場を把握するために渋沢商店の日報を横浜から取り寄せていたらしい。官職や人の繋がり、日々の経済情報がこのように比較的容易に峠を越えて伊南川流域へと入ってくるのに、一般の交通は近年まで困難をかかえていた。河原田により改修された駒止峠だが、昭和に入っても冬場に遭難死があったようである。私たちも駒止峠バイパスを抜ける際には、折からの降雪により立往生しはじめた車を横目に先を急ぐことになった。

帰路、亀屋旅館の主人が会津高原尾瀬口駅へ送ってくれた。曲がりくねって走る352号線の車窓は右も左も山肌が迫り空は遠く小さい。まだ午前中であつたはずなのに、夕暮れが近づいているかのような雰囲気だった。幾重にも重なる頂きの一つにご主人が私たちの注意を向けて漏らした一言

が強く印象に残った。「あそご越えっと関東だし。」おそらく栃木県境の荒海山であったはずだ。往路と同じ列車に乗って鬼怒川温泉に下り、乗り換えて今市市に入るあたりまで来ると天空が一気に大きく開けた。11月中旬の雪に震えた奥会津行が遠い別世界の出来事であるかのように、行く手には眩しいまでの陽光を浴びて乾いた関東平野がどこまでも続いていた。

ここに一区切りを迎えたプロジェクトは、高江洲、増田、中野ら共同研究メンバーたちの河原田研究としては第2期を画した研究活動であった。すでに次の共同研究プロジェクトの準備が進められているとうかがっている。続く第3期の研究活動ではどのような展開をみせるのか、楽しみである。